

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業）

（総括）研究報告書

要介護者に対する疾患別リハビリテーションから
維持期・生活期リハビリテーションへの一貫したリハビリテーション手法の確立研究

研究代表者 三上 幸夫 和歌山県立医科大学医学部リハビリテーション医学講座 准教授

研究要旨

医療保険の疾患別リハビリテーションが終了した後の、介護保険の生活期リハビリテーションでは、疾患別リハビリテーションからの一貫したリハビリテーション手法が確立されていない。本研究では令和2年度に疾患別リハビリテーションが終了した要介護者を対象として、アンケート調査を実施し、介護保険の生活期リハビリテーション提供実態を把握した。そして、生活期リハビリテーションに関する研究の文献レビューからエビデンスも整理した。令和3年度は、令和2年度の研究結果をまとめて公表した。そして、これを基に、疾患別リハビリテーション終了後に高齢者の状態を評価し、疾患別リハビリテーションに応じた効果的な生活期リハビリテーションを実施するための介入方法、多職種連携を含む手引きを作成した。さらに、令和4年度の介入研究に向けて倫理審査申請を行った。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

- ・田島文博
和歌山県立医科大学・医学部・教授
- ・久保俊一
京都府立医科大学・医学部・特任教授
- ・三上靖夫
京都府立医科大学・医学部・教授
- ・河崎 敬
京都府立医科大学・医学部・講師
- ・幸田 剣
和歌山県立医科大学・医学部・講師
- ・大川裕行
西九州大学・リハビリテーション学部・教授
- ・上西啓裕
宝塚医療大学・和歌山保健医療学部・助教
- ・篠原 博
青森県立保健大学・健康科学部・准教授
- ・黒田るみ
福島県立医科大学・看護学部・教授
- ・浅枝 諒
宝塚医療大学・和歌山保健医療学部・助教
- ・下川敏雄
和歌山県立医科大学・医学部・教授

※令和3年度研究は研究協力者として西村

班（20GA0201）の協力を得て実施した。

A. 研究目的

・医療保険の疾患別リハビリテーションが終了した後の、介護保険の生活期リハビリテーションでは、疾患別リハビリテーションからの一貫したリハビリテーション手法が確立されておらず、要介護者に対する生活期リハビリテーションの提供実態も把握されていなかった。また、生活期リハビリテーションに関する研究のエビデンスも整理されていなかった。介護保険での生活期リハビリテーションを行う際にも、要介護者の健康状態・心身機能・活動性を診断・評価する事が重要である。そして、この診断・評価に基づいた、生活期リハビリテーションの効果的な方法確立と、これを標準化した手引きが求められていた。そこで本研究では令和2年度に、疾患別リハビリテーションが終了した要介護者を対象として、アンケート調査を実施し、生活期リハビリテーションの提供実態を把握した。そして、生活期リハビリテーションに関する研究の文献レビューからエビデンスも整理した。令和3年度は、令和2年度研究結果を基に、疾患別リハビリテーション終了後に高齢者の状態を評価し、疾患別リハビリテーションに応じた効果的な生活期リハ

ビリテーションを実施するための介入方法、多職種連携を含む手引きを作成することを主目的とした。さらに令和2年度研究結果をまとめて公表し、令和4年度の介入研究に向けて詳細な計画書を立案し、倫理審査申請を行うことも目的とした。

B. 研究方法

1. 手引き作成

- ・令和2年度研究結果に関して、第58回日本リハビリテーション医学会学術集会シンポジウム（令和3年6月）で討議し、介護保険リハビリテーションの問題点を共有する。

- ・オンライン班会議を通じて、研究分担者と手引きの内容、項目、著者、執筆要項に関して協議する。

- ・リハビリテーション科指導医、歯科医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士、栄養士で構成された手引き作成委員会を発足する。

- ・実態調査、文献レビューの結果を基に、疾患別の生活期リハビリテーションの効果的な方法を確認し、標準化した手引きを分担執筆する。

- ・分担執筆した手引き原案を手引き作成委員会で編集し、訓練介入方法、評価方法、多職種連携を含み、具体的かつ実践的な初稿に仕上げる。

2. 令和2年度結果のまとめと公表

- ・第58回日本リハビリテーション医学会学術集会、京都、2021.6（シンポジウム）で学会発表し、英語論文を作成して投稿する。

3. 令和4年度研究倫理審査申請

- ・令和4年度の介入研究に向けて詳細な計画書を立案し、倫理審査申請を行う。

（倫理面への配慮）

- ・令和3年度研究の手引き作成に関しては、人を対象として実施する活動ではなく、研究責任者および研究分担者が文書を作成する研究であったため、倫理面の問題はないと判断した。

C. 研究結果

1. 手引き作成

- ・第58回日本リハビリテーション医学会学術集会シンポジウム（令和3年6月）で令和2年度研究結果に関して討議し、介護保険リハビリテーションの問題点を共有した。

- ・令和3年4月・7月のオンライン班会議を

通じて、共同分担者と手引きの内容、項目、著者、執筆要項に関して協議した。

- ・令和3年9月下旬にリハビリテーション科指導医、歯科医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、義肢装具士、栄養士で構成された手引き作成委員会を発足し、同年10月初旬に執筆依頼が完了した。

- ・令和4年1月に手引き原案を作成した。

- ・令和4年2月に原案を手引き作成委員会で編集校正し、令和4年3月に初稿を完成した。

- ・「要介護者に対する医療保険の疾患別リハビリテーション診療から介護保険の生活期リハビリテーションマネジメントへの一貫したリハビリテーション手法」の手引き初稿（資料1）

【目次】

- ・巻頭言

- 1) リハビリテーション医学・医療 総論
- 2) リハビリテーション診療（診断・治療・支援） 総論
- 3) 介護保険の生活期リハビリテーションにおける医師の役割
- 4) 理学療法
- 5) 言語聴覚療法
- 6) 作業療法
- 7) 義肢装具
- 8) 看護
- 9) 栄養管理
- 10) 薬物療法
- 11) 歯科治療

2. 令和2年度結果のまとめと公表

- ・第58回日本リハビリテーション医学会学術集会、京都、2021.6（シンポジウム）で学会発表した。英語論文は投稿し、査読中である。

（資料2・3）

3. 令和4年度研究倫理審査申請

- ・令和4年度の介入研究に向けて詳細な計画書を立案し、倫理審査申請を行った。

（資料4）

D. 考察

- ・作成した手引きはリハビリテーションに携わる多職種で作成したことにより、様々な介護サービスの場面で実際に活用可能であり、地域における医療・介護事業者の知識・技術水準の向上が期待される。さらに、手引きを

基にしたリハビリテーション介入を行うことで、要介護者の入浴や外出が可能になることなど、要介護者の活動性が改善すれば、要介護者だけでなく、介護者に対する恩恵も大きい。また、要介護者の活動性改善は疾患・外傷の再発予防にも繋がる可能性もある。これらは医療費・介護費の削減に繋がることになり、生活期リハビリテーション施策への直接反映だけでなく、今後、他の政策上、有意な研究へ発展する事も期待される。

・また、本研究でのアンケート調査と文献レビューの結果を国内外で公表することによって、民間での利活用により間接的な波及効果も見込まれる。

E. 結論

令和3年度は、令和2年度の研究結果をまとめて公表した。そして、これを基に、疾患別リハビリテーション終了後に高齢者の状態を評価し、疾患別リハビリテーションに応じた効果的な生活期リハビリテーションを実施するための介入方法、多職種連携を含む手引きを作成した。さらに、令和4年度の介入研究に向けて倫理審査申請を行った。令和4年度は、手引きに従ってリハビリテーション介入を行い、その過程と効果を検証する。また、介入研究を通して、介護現場の意見も取り入れ、初稿を修正して手引き第1版を出版する予定である。

F. 健康危険情報

当該年度研究では特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

当該年度では特になし

2. 学会発表

・三上幸夫, 他: 介護保険の生活期リハビリテーションマネジメントに関する文献レビュー研究. 第58回日本リハビリテーション医学会学術集会, 京都, 2021.6 (シンポジウム)

・河崎 敬, 三上幸夫, 他: 疾患別リハビリテーションから介護保険のリハビリテーションへの移行の実態 - アンケート調査より - 第58回日本リハビリテーション医学会学術集会, 京都, 2021.6 (シンポジウム)

F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

当該年度ではなし

2. 実用新案登録

当該年度ではなし

3. その他

当該年度ではなし